

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2021年度活動報告

Progress Reports on Mukogawa Women's University Center for The Study of Child Development 2021

河合優年*・難波久美子**・坂田智美***
中井昭夫*・石川道子****・玉井日出夫*****

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SAKATA, Tomomi,
NAKAI, Akio, ISHIKAWA, Michiko & TAMAI, Hideo

目次

- I. はじめに
- II. 2021年度の子ども発達科学研究センターについて
 - 1. 本年度の取り組みについて
 - 2. 外部資金の獲得について
 - 3. 次年度に向けて
- III. 研究業績

- * 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・教授・研究員
- ** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手・嘱託研究員
- *** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手
- **** 武庫川女子大学・元教授
- ***** 武庫川女子大学教育研究所客員教授

I. はじめに

2021年度も2020年度に引き続いて新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けた。コホート研究においても、対面での観察が2年続けて実施できなかった。質問紙調査は実施できたが、普段の生活でのストレスや、中学校における状況を直接聞き取れなかったのは、大きなダメージであった。とはいえ、協力者とのラポールがあることから、一部の協力者にはZoomを利用したインタビューが実施できた。今後の新たな研究方法を検討していくうえで大きな経験となった。また、分析作業は、2020年の入構制限などの影響で大幅に遅れ、科学研究費基盤研究(B)の終了が1年延期されることになり2021年度に報告書の作成を完了する予定であった。しかし、2021年度も種々の影響があり、完成させることができていない。とはいえ、データセット共有に向けて、保有するデータセットのうち乳幼児期から小学生の質問票データの整理が完了した。これらのデータセットを、論文化に向けて共同研究者と共有するなど漸進している。

保育士や保健師を対象とした、幼児期の発達指標の作成は、2020年に妥当性検討の段階まで進んでいたが、参加者の対面での検討会が持てなくなり、結果的に中断する形となった。研究だけでなく、分析作業も計画の半分にも到達できない状況であった。

西宮市教育委員会との共同研究である、タブレットによる児童生徒の心理的状態の把握ツール(こころん・サーモ)の開発は、一部の小中学校を対象に試験的に実施され、その有効性が確認されている。これにより、2022年度からの市内全小中学校での実施に向けての準備が進んでいる。また西宮市教育委員会と共同事業として、2022年度の文部科学省のいじめ・自殺対策事業へ応募したが、採択には至らなかった。コロナ禍における小学校児童の心理的状態については、スポット的に調査を行い、コロナ禍前の状況と比較検討を行った。

子ども発達科学研究センターの理論的な枠組みであるダイナミックシステム理論について、『HANDBOOK of CHILD PSYCHOLOGY and DEVELOPMENTAL SCIENCE (7th edition)』(edited by R. M. Lerner (editor-in-chief), Tufts University)の中の関連章が、子ども発達科学研究センターとの共同研究者により翻訳され、『児童心理学・発達科学ハンドブック』の1巻(本学教育研究所 河合優年教授(責任編集)、福村出版)として刊行される予定である。これは、科学研究費の分担者である、北海商科大学の玉井航太准教授、奈良教育大学の中山留美子准教授と、本学共通教育科の寺井朋子准教授が、それぞれ「社会化の弁証法的モデル」「情動発達と意識」「過程・関係・関係 - 発達 - システム」として翻訳したものである。

このように、2021年度の子ども発達科学研究センターの活動は、順調とはいえない。しかし、コロナ禍の中であって取り組めることを模索し、次の展開に向けての足場固めの年となった。

II. 2021年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて

2021年度は以下のような研究活動と成果の地域還元および成果発表を行った。

(1) コホート研究

<概要>

本研究は、子どもセンターの中心事業として継続しているものである。

今年度は、引き続きパネル調査とともに、青年期の自我の形成や、友人関係といった項目について調査を実施した。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、環境・健康調査を追加実施した。

協力者向けのニューズレターは、今年度も順調に発刊できた。今回は、新型コロナウイルス感染症の影響を確認するために実施した調査結果の一部を紹介する記事を掲載した。また、今回も“To Junior Researcher ~ Dr. Masa の人間ウォッチング”を発刊した。第5回目となる今号は、“比較と個人差”をテーマに高校2年生に届けることができた。今後も中学生以降の対象児に対して順次送付する予定である。

中学校入学後、子どもたちからも質問や感想を受け付けており、それに対し直接回答が欲しい、ニューズレターでの一般的な回答が欲しい、という選択肢を設けている。今回も直接回答が欲しい、というケースがあったため、ケースカンファレンスを持ち、それぞれに回答を作成、本人宛親展にて送付している。

また今年度は、データセットのクリーニング作業のうち、乳幼児期から小学校にかけての、すすくくコホート三重のデータセットに関する基礎的な作業を完了することができた。研究グループのメンバーでシェアし、論文化につなげていきたい。残りのデータセットについても順次作業を継続している。

<すすくくコホート三重>

すすくくコホート三重では、高校1年生には、1学期に適応調査、2月にパネル調査と環境・健康調査を実施した。また、高校2年生には3学期にパネル調査と環境・健康調査を実施した。

<武庫川チャイルドスタディ>

同様の枠組みで西宮市内（開始当時）の追跡研究である武庫川チャイルドスタディでは、中学2年生には、3学期にパネル調査と環境・健康調査を実施した。また、中学3年生には、11月にパネル調査を、3学期には環境・健康調査を実施した。今年度は、中学2年生の観察調査を計画し、スタッフはワクチン接種を済ませるなど準備をしていたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、大学構内への学外者の立ち入りが制限されていたため、夏休みの実施を見送った。

その代わりに、Zoomを利用したインタビュー調査が計画された。2学期に入ってから、昨年度観察調査を実施できなかった中学3年生を中心に呼びかけた。都合がつかなければ、親のみの参加可能、Zoomへの接続に不安がなければ、子どものみの参加も可能としたところ、22人の協力が得られた。ほとんどの協力者が、自宅から接続していたと思われ、ややリラックスした様子を見ることができた。わざわざ出かけなくてよい、ということで、協力を得られやすかったご家庭もあれば、インターネットを介したやり取りや、Zoomという仕組みに慣れていないご家庭からは、協力を得にくかったと考えられる。また、子どもの方がパソコンやインターネット環境に慣れていると思われるご家庭もあり、青年期の親子の力関係が透けて見えるような場面も散見された。

問題点として、協力者でない家族メンバーの映り込みや音声が記録されてしまう、協力者（特に母親）が、恐らく映って欲しくないと思っている背景が映り込んでしまう、という事態も発生した。そのため、可能な限り対象外のデータが記録に残らないよう編集することにした。調査の中で、不登校やその予備軍となっている協力者の中で、どうしても対面で相談がしたい、という要望があった2組については、感染防止対策を十分に行った上で、発達相談としてお受けした。また、この2組とは別に、以前から発達相談の希望があったものの、対面での実施が難しいために進めることができなかった協力者が、今回Zoomを利用し、石川道子医師に遠隔地から同席いただいて実施することができた。今年度は、このように新しい調査方法を模索した一年となった。

(2) 西宮市との「こころん・サーモ」に関わる、チェック項目の策定とシステム構築

この取り組みは、西宮市教育委員会との連携の中で、小学校入学から中学校卒業までの9年間、一人ひとりの子どもの追跡可能性を検討しようとするものである。2021年度は、小学校5年から中学校3年までの児童生徒を対象としたチェック項目作成が完了し、オンライン調査が実施された。これらの実証研究を通じて、文章表現や、使用しているフォントをユニバーサル・フォントに変更するなどの調整がなされた。2022年度の本格稼働に向けた準備を進めている。

(3) 子どもみんなプロジェクト

2015年度より、大阪大学を基幹大学とした、弘前大学、千葉大学、浜松医科大学、金沢大学、福井大学、鳥取大学、兵庫教育大学、武庫川女子大学、中京大学の10大学コンソーシアム研究が開始された。これをベースにして、2020年4月より、千葉大学を基幹とした第二期がスタートしている。2021年度は、リモート会議の開催のみとなり、全体としての具体的な活動はなされなかった。

(4) 学院教育への還元および地域連携

研究成果の地域への還元として、専門職者に対しての勉強会を実施してきたが、昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策のため、開催を断念した。

(5) Light It Up Blue, MUKOJO! 2021

自閉症スペクトラム障害など神経発達障害に関して、発達障害者支援法や障害者差別解消法などの法整備、特別支援教育や合理的配慮などが少しずつ進んでいるものの、社会における正しい理解や支援は未だ十分とは言えない。国連により4月2日は世界自閉症啓発デーと定められ、同日から1週間を発達障害啓発週間として、世界170か国以上が参加しさまざまな活動を行っている。本学でも2019年に学院80周年記念事業公募型採択事業として第1回Light It Up Blue, MUKOJO!を開催し、本学が厚生労働省、文部科学省、国連など国内外と繋がった。

文部科学省からの普及啓発の協力依頼も受け、2020年度以降は、本学教育研究所の中井昭夫教授による特別経費「Light It Up Blue, MUKOJO! ～発達障害をキーワードとした大学教育改革と地域社会貢献への基盤整備～」により引き続き継続して開催している。

Light It Up Blue, MUKOJO 2020! は、2021年4月2日の世界自閉症啓発デーから8日までの発達障害啓発週間、研究所棟のブルーライトアップを行い、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により一旦延期された市民公開講座「女性の発達障害～発達障害のある女性が一生を描ききるために必要なこと～」を2021年3月28日（日）にオンラインにより開催した。本学でも発達障害特性により様々な困難を抱えている学生は多く、全学的な取り組みが必要なことから、その第一歩となるべく、武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部FD推進委員会との共催として開催した。中井教授による講演「女性の発達障害を理解する」に引き続き、当事者・保護者・支援者の立場から笹森理絵さん、また、発達障害の女子学生支援について富山大学保健管理センター西村優紀美准教授による講演が行われた。

そして、開催の西暦年の関係などにより、Light It Up Blue, MUKOJO 2022! として、2022年3月27日（日）に市民公開講座「不登校と子どもの睡眠障害、そしてその背景にある発達障害」というテーマで、オンラインと学内会場とのハイブリッドにて開催した。自閉症スペクトラム障害の約80%に睡眠障害を伴うなど、不登校と子どもの睡眠障害と神経発達障害は密接に関係している。中

井教授による基調講演「不登校の陰に潜む子どもの睡眠障害～発達障害との関連も含めて～」に引き続き、子どもの睡眠障害・小児慢性疲労症候群当事者団体「おひさまの家」理事長の澤野平さんと、前理事長の荒西友里さんが当事者の立場から講演された。その後、中井教授とともに座談会「子どもの睡眠障害の当事者からみなさまに知ってほしいこと、伝えたいこと」を行った。また、2022年4月2日の世界自閉症啓発デーから8日までの発達障害啓発週間、研究所棟のブルーライトアップを行う予定である。

これらの Light It Up Blue, MUKOJO! の実績は、文部科学省、厚生労働省に実施機関として登録され、LIUB JAPAN のホームページやチラシなどに掲載されることを通じて、世界的にも認識されている。今後も本学が世界とつながり、また、地域に根ざす大学として神経発達障害に関する取り組みを積極的に行っているというステータスを国内外に継続的に発信していく必要がある。そのためには、将来的には、学生のサービスマーケティングなどを含めて、本学院をあげた事業として行うことが望ましいが、その基盤構築のため、当面、特別経費にて教育研究所、臨床教育学研究科、子ども発達科学研究センター主催として開催していく予定である。

2. 外部資金の獲得について

2021年度は科学研究費補助金（基盤研究（B）「コーホート研究による青年期における社会性の形成要因の解明と発達モデルの構築（課題番号：19H01759、2019年度～2021年度）」が継続されている。2020年度は、観察の中止やアルバイト（学外者）の構内立ち入り禁止等の影響で予算が消化できず、2021年度に繰り越しが認められた。2021年度も同様に次年度繰り越しの申請を行った。

3. 次年度に向けて

科学研究費補助金が、本来ならば2021年度で終了する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で2022年度に繰り越される予定である。また、2022年度には、西宮市教育委員会との共同研究協定が結ばれる予定である。このことにより、データ解析や学校へのフィードバックが円滑に進むようになることが期待される。

(1) コホート研究

2022年度の追跡調査は、すすくコホート三重では、高校3年生の協力者には、11月にパネル調査、高校2年生の協力者に3学期にパネル調査が行われる予定である。

武庫川チャイルドスタディでは、高校1年生には6月に適応調査、3学期のパネル調査が、そして、中学3年生には11月にパネル調査が実施される予定である。中学生に対する観察調査は、新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、オンラインインタビューも含め、慎重に実施を検討する予定である。

引き続きデータセットのクリーニングと論文化を進める。紙媒体データ・電子データの整理を実施し、国内の共有データ資料として広く国内外へ公開する準備を続ける。同時に、これまでに得られたデータをまとめる作業に入る。

(2) 児童生徒の学校適応

西宮市教育委員会との連携研究として進められてきた本研究に関して、2022年度は、タブレットを用いて市内全小中学校での実施が開始される。対象となる人数は4000人近くになるため、体制を整える必要がある。また、教員研修を行い、こころん・サーモの活用がさらに実質的なものになるよ

うに努力する。

(3) 子どもみんなプロジェクト

2022年度の全体計画は現時点では提出されていない。現在、中間評価のためのシンポジウムを企画中である。

(4) 国際研究の展開について

ゴンザガ大学（Gonzaga University、アメリカ合衆国）との、日米の中学生の生活実態調査の結果は、2021年5月に日米教員養成協議会（JUSTEC）がweb開催され、そのDocument Presentationの部において発表された。大学間の連携は、リモートによるものになったため極めて不活発となっている。

III. 研究業績（2021年度）

<河合優年>

▶ 著書

- 1) 日本児童研究所（監）. 河合優年・内藤美加・斉藤こずゑ・高橋恵子・山祐嗣（編）（2021）. 児童心理学の進歩 2021年版（VOL.60）金子書房.
- 2) Wormhoudt, R., Savelsbergh, G. J. P., Teunissen, J. W., & Davids, K. (2018). The Athletic Skills Model: Optimizing Talent Development Through Movement Education. Routledge.
（ウォンホート R・サフェルスバーグ G.J.P・テウニッセン J.W・デイヴィス K・幸野邦男（訳）・木村牧子（訳）・河合優年（監訳）（2021）アスレチックスキルモデル：才能を適切に発揮させる運動教育. 金子書房.）

▶ 論文

- 1) 河合優年・難波久美子・坂田智美・中井昭夫・石川道子・玉井日出夫（2021）. 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2020年度活動報告. 武庫川女子大学教育研究所研究レポート, **51**, 169-177.
- 2) 河合優年・難波久美子・玉井航太（印刷中）. 縦断研究は発達の解明にどう貢献するのか ―発見的研究のデータリソースとしての活用. *発達心理学研究*.

▶ 学会発表

- 1) Terai, T., Takai, H., Kawai, M., & Alfonso, V. C. (2021). The Possibility of the Research in Coronavirus Pandemic : Developing a Hypothesis Using the Past Data. JUSTEC Proceedings and Abstracts of the 31st Japan -U.S. Teacher Education Consortium. P.17. (May, 2021. On-line).
- 2) Namba, K., Kawai, M. (2021). Longitudinal study of relationship between social skills and stability of self-regulatory behavior. Poster presented at International Congress of Psychology 2020+. (July, 2021. On-line).
- 3) 難波久美子・河合優年・田中滋己（2021）. COVID-19による緊急事態宣言下における中学生の生活実態に関する調査報告 3.一家庭での過ごし方とQOLとの関連一. 日本心理学会第85回大会論文集, P.187. (Web開催, 9月)

▶ その他

- 1) 河合優年 「子ども点描」産経新聞兵庫版 隔週コラム

<中井昭夫>

▶ 著書

- 1) 中井昭夫 (2021). 2) 不登校・睡眠障害 (15. 精神・行動・心身医学). 水口雅・山形崇倫 (編) クリニカルガイド小児科 専門医の診断・治療. Pp.876-882. 南山堂、東京.
- 2) 中井昭夫 (2021). 5. 発達性協調運動症 (第1章 神経発達症群). 「精神科治療学」編集委員会 (編) 精神科治療学第36巻増刊号: 今日精神科治療ハンドブック Pp.20-21. 星和書店、東京.
- 3) 中井昭夫 (2022). 第8章 協調をアセスメントする意義—DCDQ, M-ABC2 日本語版の開発と臨床応用. 岩永竜一郎 編著、柘植雅義 (監). ハンディシリーズ「発達障害支援・特別支援教育ナビ」. Pp.68-78. 金子書房、東京.
- 4) 中井昭夫 (編著)・若林秀昭・春田大志・小野ひろみ (2022). イラストでわかるDCDの子どもをサポートガイド～不器用さのある子の「できた!」が増える134のヒントと45の知識～. 合同出版、東京.
- 5) 中井昭夫 (2022). 子どもの睡眠と脳の発達～小児編～ 武庫川女子大学

▶ 論文

- 1) 中井昭夫 (2021). 特集: 学習の遅れを支える—限局性学習症のいま— 発達性協調運動障害と学習困難. *そだちの科学* **37**: 42-45.
- 2) Nobusako, S., Osumi, M., Furukawa, E., Nakai, A., Maeda, T., Morioka, S. (2021). Increased visual bias in children with developmental coordination disorder: Evidence from a visual-tactile temporal order judgment task. *Human Movement Science*. **75**: 102743.
- 3) Katagiri, M., Ito, H., Murayama, Y., Hamada, M., Nakajima, S., Takayanagi, N., Uemiya, A., Myogan, M., Nakai, A., Tsujii, M. (2021). Fine and gross motor skills predict later psychosocial maladaptation and academic achievement. *Brain & Development*.
<https://doi.org/10.1016/j.braindev.2021.01.003>.
- 4) Shirama, A., Stickley, A., Kamio, Y., Nakai, A., Takahashi, H., Saito, A., Haraguchi, H., Kumazaki, H., Sumiyoshi, T. (2021). Emotional and behavioral problems in Japanese preschool children with motor coordination difficulties: the role of autistic traits. *European Child & Adolescent Psychiatry*.
<https://doi.org/10.1007/s00787-021-01732-7>.
- 5) Ito, T., Ito, Y., Nakai, A., Sugiura, H., Noritake, K., Kidokoro, H., Natsume, J., Ochi, N. (2021). Bilateral asymmetry in the gait deviation index in school-aged children with the trait of developmental coordination disorder. *Gait & Posture* **88**: 174-179. -doi.org/10.1016/j.gaitpost.2021.05.027.

▶ 学会発表

- 1) 片岡新・信迫悟志・中井昭夫 (2021). 年長児における平仮名・片仮名視写能力に影響する発達特性の検討—文字別における書字判読性の関連について—第4回日本DCD学会学術集会 (4月、

青山学院大学・ハイブリッド開催).

- 2) 長岡雅美・三好智子・綿引勝美・上田憲嗣・中井昭夫 (2021). 聴覚障害児におけるリズム能力とバランス能力の特性. 第4回日本DCD学会学術集会 (4月、青山学院大学・ハイブリッド開催).
- 3) 三好智子・長岡雅美・綿引勝美・上田憲嗣・中井昭夫 (2021). 描画課題における適応動作の予備的研究. 第4回日本DCD学会学術集会 (4月、青山学院大学・ハイブリッド開催).
- 4) Ito J, Kamei A, Araya N, Akasaka M, Mori F, Ito K, Fujiwara E, Kubo C, Takeishi S, Sasaki M, Nakai A, Oyama K. (2021). Diffusional kurtosis imaging study of childhood epilepsy with motor coordination problems. 第54回日本てんかん学会 (9月、名古屋国際会議場・Web開催).
- 5) 米田直人・鴨川 拳・川中瑞帆・中井昭夫・岩永竜一郎 (2021). 神経発達症リスク早期発見のための検査開発～7～10歳における協調運動項目の基準関連 妥当性の予備的調査～ 第38回日本感覚統合学会研究大会 (10月、Web開催).
- 6) 梅野裕理・立山清美・大歳太郎・中井昭夫 (2021). 児童発達支援事業所に通う幼児における手洗いの特徴 第55回日本作業療法学会 (9月、Web開催).
- 7) 越知信彦・伊藤祐史・伊藤 忠・中井昭夫 (2021). 神経発達症に対する3次元歩行分析のアプローチ—特にDCD特性との関連から— 第126回日本小児精神神経学会 (10月、Web開催).
- 8) 玉井駿也・中井昭夫 (2021). 不器用さのある学童に対する学校における理学療法士の介入の効果検証に関する研究 第8回日本小児理学療法学会学術大会 (11月、Web開催).

▶ 講演・その他

- 1) 中井昭夫 (2021). 特集「神経発達障害のある子どもの睡眠の問題の理解と対応」. 発達協会 月刊 発達教育 40 : 4-11.
- 2) 中井昭夫 (2021). 「福井は私の一部、私の誇り」. 福井大学子どものこころの発達研究センター 福井大学子どものこころの発達研究センター設立10周年記念誌 (9月)
- 3) 中井昭夫 (2021). TREND「WITH コロナ／ニューノーマル時代を生き抜く」. 武庫川学院 男女共同参画推進室・女性活躍総合研究所. 男女共同参画推進室・女性活躍総合研究所 News Letter. https://www.mukogawa-u.ac.jp/~gsankaku/publication/pdf/news_letter_13.pdf (10月)
- 4) 中井昭夫 (2021). 「専門医がお答えします! 気になる症状のQ & A」 社会保険出版社 四季のけんこう「冬のけんこう」 p.19 (11月)
- 5) 中井昭夫 (2022). NHK Eテレ「すくすく子育て」「わが家のルール・決まりごと」 <https://www.nhk.or.jp/sukusuku/index.html> (3月26日)
- 6) 中井昭夫 (2022). 「みんなに知ってほしいDCDのこと～不器用な子どもの理解と支援にむけて～」 特定非営利活動法人 神経発達症研究推進機構、京都大学課題解決型高度医療人材養成プログラム (ASD Project) 共催シンポジウム「子どもと大人の不器用さ～発達性協調運動症 (DCD) の理解と支援～」 (3月19日、オンライン)

<難波久美子>

▶ 論文

- 1) 河合優年・難波久美子・坂田智美・中井昭夫・石川道子・玉井日出夫 (2021). 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2020年度活動報告. 武庫川女子大学教育研究所研究レポート, 51, 169-177.

- 2) 河合優年・難波久美子・玉井航太（印刷中）. 縦断研究は発達¹の解明にどう貢献するのか — 発見的研究のデータリソースとしての活用. *発達心理学研究*.

▶ 学会発表

- 1) Namba, K., Kawai, M. (2021). Longitudinal study of relationship between social skills and stability of self-regulatory behavior. Poster presented at International Congress of Psychology 2020+. (July, 2021. On-line).
- 2) 難波久美子・河合優年・田中滋己 (2021). COVID-19 による緊急事態宣言下における中学生の生活実態に関する調査報告 3. 一家庭での過ごし方と QOL との関連一. 日本心理学会第 85 回大会論文集, P.187. (Web 開催, 9 月)